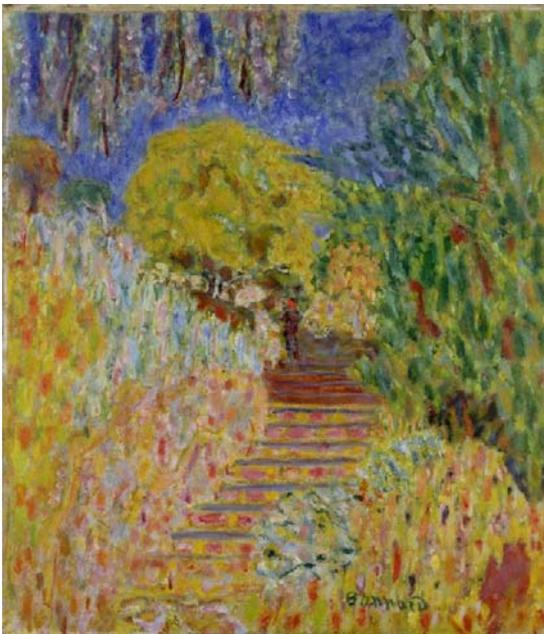


ボナールの庭、 マティスの室内

日常という魅惑 Garden and Interior
Visions of intimate world by Bonnard and Matisse



表紙作品：広報作品②
アンリ・マティス
《リュート》
1943年
油彩/カンヴァス、60.0×81.5cm
ポーラ美術館蔵
©2009 Succession H.Matisse, Paris /
SPDA, Tokyo

※ 著作権の関係でホームページ上に
図版を掲載できません。

2009年9月12日（土）～2010年3月7日（日）

この件に関するお問合せ

ポーラ美術館 広報事務局

TEL 03-3575-9823

FAX 03-3574-0316

株式会社ポーラ・オルビスホールディングス
グループ広報室

TEL 03-3494-7123

FAX 03-3494-7640

財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館（神奈川県足柄下郡箱根町）では、2009年9月12日（土）から2010年3月7日（日）まで、企画展『ボナールの庭、マチスの室内 ー 日常という魅惑』を開催します。

「庭」と「室内」。どちらも人間の生活と切り離すことのできない空間として、西洋ではしばしば絵画に描かれてきました。キリスト教世界で「エデンの園」を起源とする庭は、現世から隔てられた楽園として、一方の室内は、日々の営みがなされる通俗的な場として表わされるのが一般的でした。

19世紀のフランスにおける市民社会の成熟は、「庭」と「室内」、双方の空間に新たな局面を切り拓きます。ナポレオン三世のもと、セーヌ県知事オスマンにより進められたパリの大規模な改造事業は、市内各所に緑豊かな公園や庭園を生み出しました。同時期には、都市の外へ自然とのふれあいを求める動きもみられるようになります。都市に造られた庭と、郊外の自然において見出された庭は、印象派をはじめ、同時代の画家たちの作品に頻繁に登場するようになります。また、モネが「睡蓮」の連作を描いたジヴェルニーの庭やボナールが見つめ続けた周辺の風景は、「画家の庭」、すなわち画家が独自に絵画を追究する親密な空間としてとらえることができます。

19世紀末、「室内」もその日常性や閉鎖性が強調され、絵画の重要な主題となります。室内装飾の様態を画面に巧みに採り入れたヴイヤール、生活をともにする伴侶を描き続けたボナール、そして室内空間を装飾的構成へと昇華させたマチス。20世紀に入ると、室内はただ画面に描かれるのではなく、画家に着想を与え、制作を根本からつき動かす空間となっていきます。

本展覧会では、「庭」と「室内」という日常の空間が、新たな時代の絵画制作とどのような関わりや結び付きをもっていたのか、そしてどのような表現を切り拓いたのかを紹介し、ボナールとマチスの画業を新たな視点から再考します。

表紙作品：広報用作品①

ピエール・ボナール
《ミモザのある階段》

1946年頃

油彩/カンヴァス、80.8×68.8cm

ポーラ美術館蔵

表紙作品：広報用作品②

アンリ・マチス
《リュート》

1943年

油彩/カンヴァス、60.0×81.5cm

ポーラ美術館蔵

©2009 Succession H.Matisse,Paris / SPDA,Tokyo

企画展『ボナールの庭、マティスの室内 — 日常という魅惑』 開催概要

- 展覧会名 : 『ボナールの庭、マティスの室内 — 日常という魅惑』
Garden and Interior : Visions of intimate world by Bonnard and Matisse
- 作品点数 : ポーラ美術館収蔵作品 46 点、国内美術館所蔵作品 11 点 全 57 点
※ボナールの絵画作品 16 点、マティスの絵画作品 8 点を展覧
※会期中、展示替がございます。詳細はお問い合わせください。
- 主催 : 財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
- 会期 : 2009 年 9 月 12 日 (土) — 2010 年 3 月 7 日 (日)
- 会場 : ポーラ美術館 展示室 1
〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山 1285
Tel. 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108
ホームページ <http://www.polamuseum.or.jp>
- 開館時間 : 午前 9 時～午後 5 時 (入館は午後 4 時 30 分まで)
- 休館日 : 会期中無休
- 入館料 :

	個人	団体 (15 名以上)
大人	1,800 円	1,500 円
シニア割引 (65 歳以上)	1,600 円	1,500 円
大学・高校生	1,300 円	1,100 円
中学・小学生	700 円	500 円

※料金はいずれも消費税込み。
 ※中学生・小学生の入場については、土曜日は無料です。
 ※中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生及び引率教員等の入場は無料です。

【担当学芸員によるギャラリートーク】 展覧会のみどころを美術館講堂及び展示室でご紹介します。

第 1 回 : 2009 年 10 月 19 日 (月) 第 2 回 : 11 月 19 日 (木) 第 3 回 : 12 月 12 日 (土)

第 4 回 : 2010 年 1 月 30 日 (土) 第 5 回 : 2 月 27 日 (土)

14:00～15:00 / 先着 30 名様まで。美術館の講堂にお集まりください。

1. 庭

i. 都市の庭／自然の庭

西洋世界における庭の起源は、人類原初の楽園である「エデンの園」や聖母の佇む「閉じられた庭」など、神のもとで調和や純潔の保たれた、キリスト教における特別な空間へとさかのぼることになります。公共の空間として、庭が広く人々に受け入れられるようになったのは、フランスでは19世紀のことです。ナポレオン三世による大規模な都市改造事業により、パリには緑あふれる公園や庭園が次々と整備され、市民たちが憩いと社交の時を過ごす「都市の庭」が誕生しました。

同時に、都市生活に疲れて自然との触れ合いを求める人々は、パリ近郊の村落へと向かいます。都市生活者が新たに見出し、親しんだ田園や森は、いわば「自然の庭」といえるでしょう。

時代と社会の変化から生まれたこれらふたつの「庭」は、バルビゾン派以降、印象派をはじめ、同時代の情景にモチーフを求めた画家たちの作品にしばしば現われるようになります。「都市の庭」は、市民社会の中心であったブルジョワジーが余暇を過ごす空間として、「自然の庭」は、散策や労働などを通じて自然と人間とが交わる空間として見出すことができます。

■ おもな出品作品

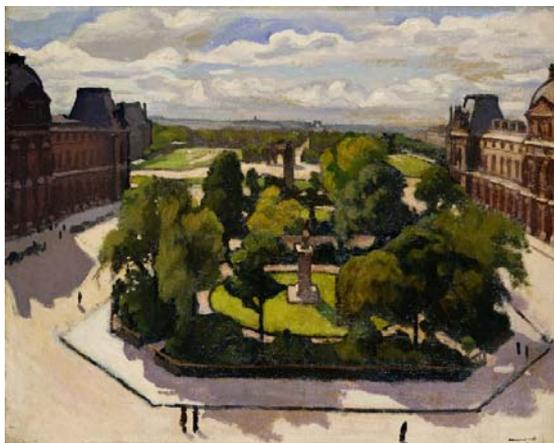
アンリ・ルソー 《飛行船「レピュブリック」号とライト飛行機のある風景》1909年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

アルベール・マルケ 《パリ、カルーゼル広場》1910年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

ジャン＝バティスト＝カミーユ・コロー 《森のなかの少女》1865-1870年頃、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

クロード・モネ 《散歩》1875年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

カミーユ・ピサロ 《エラニーの花咲く梨の木、朝》1886年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵



広報用作品③

アルベール・マルケ 《パリ、カルーゼル広場》

1910年、油彩/カンヴァス、65.1×81.1cm

ポーラ美術館蔵

ii. 楽園の庭

旧約聖書の『創世記』に現われる「エデンの園」や「閉じられた園」を起源とする庭は、純潔の聖母や楽園の主題として、繰り返し描かれてきました。中世の「愛の庭」の流れを汲むとされる18世紀フランスの雅宴画も、田園や庭園を男女の戯れる密やかな空間として描いています。

19世紀後半から20世紀にかけてのフランス絵画においても、「エデンの園」やエヴァは主題として描かれ、クロスら新印象派の画家たちは、人間と自然との調和への希求から、牧歌的な田園風景を理想郷として描きました。西洋の文化に深く根ざした「楽園の庭」のイメージは、近代化に抗う思潮などと結びつき、さまざまな画家の絵画制作のモチーフとなりました。

■ おもな出品作品

ポール・ゴーガン 《異国のエヴァ》1890/1894年、水彩/紙、ポーラ美術館蔵 ※後期展示

アンリ・ルソー 《エデンの園のエヴァ》1906-1910年頃、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

アンリ・エドモン・クロス 《森の風景》1906-1907年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵



ポール・ゴーガン 《異国のエヴァ》
1890/1894年、水彩/紙、42.8×25.1cm
ポーラ美術館蔵



アンリ・ルソー 《エデンの園のエヴァ》
1906 - 1910年頃、油彩/カンヴァス、46.5×61.4cm
ポーラ美術館蔵

iii. 画家の庭

19世紀末から20世紀にかけて、庭は画家にとって単に絵画の主題を超えた意味を持つようになります。若いころから庭へ関心を寄せていたモネは、1899年よりジヴェルニーの自邸の庭を集中的に描き始めます。また同じころ、オワーズ地方の小村ジェルブロワに移住した画家ル・シダネルも、自邸に庭をつくり、その閉じられた空間を晩年まで描き続けました。個人の庭という特殊な空間は、画家の絵画的探究を支え、作品成立の不可欠な要素となりました。

一方、ボナールは、庭に自ら手を入れることには関心を示しませんでした。常にボナールを惹きつけたのは、日常的に歩き、眼にする自邸の周辺の世界であり、そこに垣間見られる一瞬の輝きでした。独特の構図と色彩によって丹念に描かれた光景は、画家の親密なまなざしに深く根ざした「ボナールの庭」といえます。

■ おもな出品作品

- アンリ・ウジェーヌ・ル・シダネル 《薔薇と藤のある家》1907年、油彩/カンヴァス、川村記念美術館蔵
アンリ・ウジェーヌ・ル・シダネル 《三本のバラ》1925年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
クロード・モネ 《睡蓮の池》1899年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
ピエール・ボナール 《りんごつみ》1899年頃、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
ピエール・ボナール 《地中海の庭》1917-1918年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
ピエール・ボナール 《ミモザのある階段》1946年頃、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵



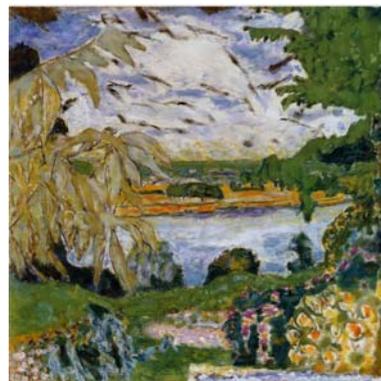
広報用作品④
ピエール・ボナール 《りんごつみ》
1899年頃、油彩/カンヴァス、168.0×129.8cm
ポーラ美術館蔵

【特集】ボナールとモネ

ボナールはノルマンディー地方のヴェルノンに拠点を置いた1912年以降、そこから数キロしか離れていないジヴェルニーに住むモネのもとを、しばしば訪れています。モネもまたボナールの邸宅「マ・ルロット」を訪れていたようで、1925年頃には、当時制作していた睡蓮の大壁画の進捗について語った手紙をボナールに送っています。ボナールがモネの大壁画に関心を寄せていたことは、アトリエの壁に絵葉書を貼り付けていたことからもうかがえます。晩年に至るまで探究を続けたボナールの画業に、この時期のモネとの接触がどのような影響を及ぼしたかを探ります。



クロード・モネ 《睡蓮の池》
1899年、油彩/カンヴァス、88.6×91.9cm
ポーラ美術館蔵



ピエール・ボナール 《ヴェルノン付近の風景》
1929年、油彩/カンヴァス、63.4×62.4cm
石橋財団ブリチストン美術館蔵 ※前期展示

II. 室内

i. 世紀末の室内

絵画史において「室内」は、肖像画や風俗画、静物画のなかに見られますが、人物や寓意を込めた事物など、中心となる主題の背景にとどまり、その空間自体に焦点が当てられることはほとんどありませんでした。その日常性や閉鎖性に積極的な意味が見出されるようになったのは、文学の領域を中心に象徴主義の思潮が高まりをみせた、19世紀末になってからのことです。当時その影響下にあったボナールやヴエイヤール、ムンクの作品には、密やかさや倦怠、ときには神秘性すら漂わせる室内空間の表現を見ることができます。

■ おもな出品作品

エドゥアール・ヴエイヤール 《窓辺の女》1898年、油彩/厚紙、愛知県美術館蔵

ピエール・ボナール 《灯下》1899年、油彩/紙、石橋財団プリチストン美術館蔵 ※後期展示

エドヴァルド・ムンク 《犬のいる自画像》1925-1926年頃、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵



エドゥアール・ヴエイヤール 《窓辺の女》
1898年、油彩/厚紙、28.5×42.5cm
愛知県美術館蔵



ピエール・ボナール 《灯下》
1899年、油彩/紙、42.5×50.4cm
石橋財団プリチストン美術館蔵 ※後期展示

ii. ボナールの室内

1900年代以降のボナールは、明るい居間や化粧室で身繕いをするパートナーのマルトの日常の姿を描くようになります。世紀末の暗示的な表現が拭い去られた画面では、生活の中でふと眼にするような光景があざやかな色彩へと丹念におきかえられ、あたかも永続するような世界へと高められています。

■ おもな出品作品

ピエール・ボナール 《化粧室の裸婦》1907年、油彩/カンヴァス、川村記念美術館蔵

ピエール・ボナール 《湯上がり》1917年、油彩/カンヴァス、サントリーミュージアム[天保山]蔵

ピエール・ボナール 《浴槽、ブルーのハーモニー》1917年頃、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

アンリ・ルバスク 《オダリスク》1925年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵 初公開

ピエール・ラブラード 《バラをもつ婦人》油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵 初公開



広報用作品⑤
ピエール・ボナール 《浴槽、ブルーのハーモニー》
1917年頃、油彩/カンヴァス、45.8×55.1cm
ポーラ美術館蔵



ピエール・ボナール 《化粧室の裸婦》
1907年、油彩/カンヴァス、50.0×73.0cm
川村記念美術館蔵

iii. マティスの室内

マティスは室内を1910年代後半のニース滞在期から本格的に描き始めています。そこでは、横たわる裸婦や本を読む女性、楽器を奏でる女性など、伝統的な室内画にみられる人物モチーフが、室内の様々な要素と造形的に呼応することにより、統一感のある画面が構成されています。眼の前の対象に引き起こされた自らの感覚を、線描と色彩を様々に駆使した「装飾的構成」によって絵画に実現し続けたマティスにとって、室内は制作の着想がもたらされる場所であると同時に、画面の構成に関わる重要な絵画的要素であったといえるでしょう。

■ おもな出品作品

- アンリ・マティス 《横たわる裸婦》 1921年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
- アンリ・マティス 《中国の花瓶》 1922年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
- アンリ・マティス 《紫のハーモニー》 1923年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵
- アンリ・マティス 《窓辺の婦人》 1935年、パステル/厚紙、ポーラ美術館蔵
- アンリ・マティス 《リュート》 1943年、油彩/カンヴァス、ポーラ美術館蔵

【次回企画展】

『ポーラ美術館の日本画 — 杉山寧、平山郁夫、東山魁夷を中心に』

2010年3月13日(土) - 9月5日(日)

前期 3月13日(土) - 6月8日(火)

後期 6月11日(金) - 9月5日(日)

※6月9日(水)、10日(木)は展示替のため、企画展示室は休室となります。

【常設展示】 2009年9月9日（水）～2010年3月7日（日）

※会期中、一部作品の展示替がございます。詳細についてはお問い合わせください。

＜絵画＞ ポーラ美術館の絵画

ポーラ美術館は、フランス印象派のモネやセザンヌから、ピカソやモディリアーニによる20世紀絵画に至るまでの西洋絵画をはじめ、日本の画家による洋画、日本画も数多く収蔵しています。常設展示「ポーラ美術館の絵画」では、当館のコレクションから約60点の絵画作品を選んで展示し、西洋と日本、それぞれの絵画の近代における様相を探ります。

＜小企画＞ 森 芳雄 — ひとのぬくもり

「私は“人間”に一番関心を持つ」と語った洋画家、森芳雄（1908-1997）は、その言葉どおり、飽くことなく人物像を追究し続けました。量感を強調した人物像には顔が描かれていませんが、柔らかな色彩の協奏に包まれた画面からは、個々の人物に魂が宿り、ぬくもりを持っていることが伝わってきます。小企画では、当館収蔵作品の全12点を初めて公開し、「ひと」を見つめつけた森芳雄の魅力に迫ります。

＜ガラス工芸＞ ガレ、ドーム、ティファニーのガラス — 花ひらくアール・ヌーヴォー

19世紀末から20世紀初めにかけて、植物をはじめとする自然界の生命をいきいきと表現したアール・ヌーヴォー。本展では、当館のガラス工芸コレクションの中から、アール・ヌーヴォーのガラス工芸作家であるガレ、ドーム兄弟、そしてティファニーによる、植物をモチーフとして制作された華麗な作品の数々を紹介します。

＜化粧道具＞ 粧いの空間 — ロココからアール・ヌーヴォー

化粧部屋は、女性にとって最も大切な室内空間のひとつでした。18世紀から20世紀初め、自由におしゃれが楽しめなかった時代に、女性たちはどのように化粧にいそしんでいたか、鏡の前で化粧する女性とその美意識を、化粧道具や化粧法によって探ります。また、18世紀フランスの王妃マリー＝アントワネットや19世紀イギリスのヴィクトリア女王などの時代の化粧風景も紹介します。